

日本ことわざ文化学会第六四回定例研究会「文殊の知恵」発表

柳田社会科「人の一生」と現代小学生の創作コトワザ

小田 富英

『柳田国男全集』編集委員、全面教育学研究会会員

発表趣旨…庄司和晃先生のもとに集まった数人で全面教育学研究会を立ち上げたばかりの頃、教育雑誌『ひと』から、若手による授業づくりの会の呼びかけがあり参加した。今から三十年以上も前のことである。太田次郎社の狭い会議室に二十人ほどが集まり熱気のある会であった。私は、柳田社会科の「人の一生」単元の現代化を訴えたが、概ね二つの意見が大勢を占め受け入れられなかった。ひとつは、柳田とは保守思想の持ち主ではないかという意見と、学校教育でやるのだから、もっと科学的な事項を教えるべきだというものであった。当時の編集方針や執筆者をめぐって政治的な綱引きが背景にあったので、より議論に拍車がかかったのかもしれない。社長の浅川さんだけがやってみたらどうかと言ってくれたが、ここでは無理だとあきらめ飲み会の誘いを断って席を立った覚えがある。こうして、「人の一生」の実践は、全面教育学研究会内部だけで醸成され、今に続いている。その間社会は急変し、人の成長の「人生儀礼」を実践する家庭の教育力は減退、地域もまた共同体の崩壊で、ごく一部を除いて見る影もない。また、記録に残す役割の民俗学のなかでもごく一部の人たちの研究対象でしかなかった。そんな時代だからこそ、学校で「人の一生」を学ぶ機会があつてよいと考える。私のささやかな実践は、「人の一生」を軸としながらも、理科の「ヒトのからだ」、国語の「私の一生計画・〇〇年後のある日の日記」の小学校卒業期三部作授業どまりであった。今回、若い先生方の協力を得て、「人の一生」と人生諺、さらには「十二歳の創作コトワザ」へと発展することができた。今回の発表は、小学校卒業を目前にした、およそ百人の六年生が創った「十二歳コトワザ」の鑑賞と、「人の一生」の現代化の可能性を提案することを目的とし、亡き庄司和晃先生の学恩に報いた。

一、柳田国男と「人の一生」

① 柳田民俗学における「人の一生」の位置

「以前尋常の日本人が、人の一生といふものに就いてどういふ風な見方、考へ方感じ方をして居たらうかといふ問題に、深い興味を抱く者は私たちだけではあるまい。所謂精神文化の研究を志す人々は、或いはもつと切実に、之を詳かにしたいといふ念に燃えて居られるかも知れぬ。ところが是ばかりは案外に方法が乏しいのである。歴代先覚の筆の跡は、もともと群を抜くが故に残し伝へられたものばかりであつた。斯くの如く考ふべしといふ教訓は素より多い。おのれは斯く感じたりといふ御手本は溜まつて居る。しかし他の多数の普通の者が、同じ道を附いてあるいたといふ証拠はまだ無いのみか、寧ろちがった方角を向く者が多い為に、斯ういふ記録の重要性が、特に大きかつたとも考へることを許されるのである。少なくとも類推は無理であり、別に方法の依るべきものが無くてはならぬのである。日本民俗学の方法はその一つの試みであるが、私は最初に人間生存の開始に関して、今でも国人の中に行はれつづけているかと思ふ行為の間から、少しづつ其根拠に潜むものを探り出さうとする。其次には個々の人生の終末、即ち幽明境を隔つる日の感覚の、

我々の行事に現はれて居るものを見、更に進んではその生死の中間に於て起るべき、神と人、又は人と人との交渉の諸相を、観察して行くのが順序かと思つて居る。本文の記述には明らかな如く、是はまだ決して何等の結論でも無い。我々の調査はまだ国の版図の三分の一にも及んで居ない。是からわかつて来る新たな事実によつて、補正変改せらるべきものはきつと多いのであるが、少なくとも此方法を以て細心に真実を究めんと努めるならば、末には我々は今よりもよほど賢くなるだろうと期待することは出来る。何か物深い意味があるらしいといふだけの、暗示を提供する題目ならば、まだこの以外にも幾つかあるが、是はもう少し民俗学を理解する者に向つて、もつと沢山の労苦を重ねた人が説くべきもので、私などは其任で無いと思つて居る。たゞこの小さな一文が縁となつて、今少しく自由に一国の現世相が考察し得られ、それが行く行くまとまつて、大きな共同の悟りとなる日を夢想するばかりである。(原題「誕生と成年式」。昭和二年二月、「社会と子ども」と改題されて『家閑談』に収録。)

※生活の疑問から民俗学を創ろうと考えていた柳田にとつて、「人の一生」は格好のテーマであつたことがわかる。それだけでなく、この文章のなかには、敗戦前と敗戦後の柳田の思いが隠されているのである。そのことはいずれ別の機会に発表した

い。

② 柳田国男の人間観からみた「人の一生」

「こんな無邪気な少年が、一人前の若者となるには、どうしても二、三年の中間期があつた。それを播州などではヒノデ(日の出)と呼んでいた。ヒノデはまことによい言葉だが、たいていの児童は、この期間に少しずつ母が教え得なかつた人生を学んで行くのである。あるいは小若い衆という地方もあり、また青二サイなどともいわれるが、二サイはじつはニイセ、新しいセ、すなわち娶り得る者の意味である。

私たち兄弟三人(自分と弟二人のことかはこういう空気の中に生れながら、ついに正式の成人教育をうけずにしまった。もとは僧侶とか特殊な芸人とかの、わずかな数に限られていたのが、新しい教育の進むにつれて、年ましにその勢力が増大して、よくも考えずに古い習わしを崩壊させたのは、一種の無血革命ともいふべきものだった。そうしてこの目に見えぬ変動の中に、次第に消えたり忘れつくされたりしたものに、まだいろいろの重大なものがあった。国の近世史の軽く取扱われていたことは、何だか自分たちにも責任があるように思う。(「一人前の話」『故郷七十年』)

※柳田の最後の帰郷の折の県立福岡高校での講演会の演題が、「青二才について」だという。(今の国語辞書では「青二才」はマイナスイメージで語られている。)若者への最後とも言えるメッセージが、社会から自分達がどのように見られているかを考えさせるものであつたこと、言葉に興味をもたせる話であつたことはもつと注目されている。

③ 柳田社会科(実業之日本社版社会科教科書『日本の社会』の小学校最終単元としての「人の一生」(資料)

「一、単元設定の理由

一

社会機能の分析にかたよつた社会科単元設定者たちからみれば、この「人の一生」とい

う単元は奇異に感ずるであろう。交通、報道、労働、工場、貿易、選挙、平和、さらに地理的、歴史的単元について学ぶのもよいが、結局は、人生を力いっぱい楽しく送るための学習なのである。

いまここに「人の一生」という単元を特設し、人生にいくつかの段階があり、人々はみな盛んな時期ばかりでなく幼少時代、老後などには、家の人々や社会の制度による世話にならなければならぬことを理解させ、やがて、力強い各自の一生を過すための端緒をつくってやることは、意義深いものであろう。

二

第六学年の三学期である。いよいよ中学校へうつろうとしている。この卒業まぎわには、児童たちは、心のうちから小学校生活への反省と中学校生活への希望をもつようになる。それはいま卒業と入学という人生の一つの階段をふみこえようとしているからである。

この機会を利用し、自分たちの幼少時代をふりかえりながら、それを手がかりに、人生をみつめ、平凡なる人の一生について理解を深めさせようとすることは、学習の心理の上にも無理のない時期である。

三

民法の改正によって、家族制度は変革され、それにともなつて家族関係の諸問題が、新しい角度からとりあげられることとなった。その場合、旧来の習慣から抜けきれず、いろいろな誤解を生じ、道徳問題となり、やがて法律問題に及ぶことがしばしばである。

こうした社会的な課題に対しても、この単元は一つの役割を果すであろう。」（『日本の社会 学習の手引き』第六学年）

※今読んでも充分通用する現状把握である。先見の明があつたとも評価できる。

二、民衆の捉えた「人の一生」

（「成長」認識論彙集、庄司和晃レポートより抜粋）（「一生」認識論彙集、同上より抜粋）

- ・ 百日の寝っ子たれっ子

（寝る子は育つ）

- ・ 一つ二つは愛らし盛りええ
- ・ 三つ子の魂百までも
- ・ 五つ六つは憎まれざかり
- ・ 七つまでは神のうち
- ・ 八つ子もかんしゃく
- ・ 十で神童
- ・ 十三までは七面変わる
- ・ 十五過ぎて子の意見
- ・ 十七八は藪力

（鬼も十八番茶も出花）

- ・ 十九厄年孕むか死ぬか
 - ・ 二十過ぎればただの人
 - ・ 三十の尻括り
 - ・ 四十くらがり（四十がったり）
 - ・ 五十になれば五十の縁あり
 - ・ 六十の手習い
 - ・ 七十の三つ子
 - ・ 八十のちよろちよろわっぱ
- （老いてちごになる）

参考

「子曰く 吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず。」

（孔子『論語』）

子供時代

- ・ 子どもと青田はほめられぬ

- ・ 子どもさわげば雨がふる
- ・ 子どもは風の子
- ・ 子に甘いは親の常
- ・ 子の心親知らず
- ・ 子はかすがい
- ・ 子を一人育てるに生きる瀬か死ぬ瀬が七度ある

若者時代

- ・ 子を持って知る親の恩
- ・ 子を持てば七十五度泣く

・ 未だ末の時いまみ

- ・ 年寄りの物忘れ 若い者の無分別
- ・ 若い時旅をせねば老いての物語がない
- ・ 若い時の辛労は買うてもせよ
- ・ 若き者と風上の火とは油断ならず
- ・ 娘を見るより母を見よ
- ・ 娘は後で褒め
- ・ 嫁は手を見てもらえ
- ・ むこは座敷から貰え嫁は庭から貰え

親時代

- ・ 子持ちになるとだんまりが物言う
- ・ 親がうそつきや子がうそならう
- ・ 親の意見と冷や酒はあとからきく
- ・ 親の悪いと味噌の悪いは直し様がない
- ・ 親は死んでも子は食休み
- ・ 親は千里に行くも子を忘れず

年寄り時代

- ・ 年は寄れども心は寄らぬ
- ・ 年こそ薬なれ
- ・ 年寄りと子供はよその物がうまい
- ・ 老いの一徹
- ・ 年寄りの世迷い言
- ・ 老いては子に従え
- ・ 老いては再び稚児になる

三、現代の小学生が考える「十二歳」(「十二歳」創作コトワザ)(資料)

A 中野区立北原小学校 六年二組(二〇一四年度)

B 練馬区立石神井東小学校六年一組(二〇一五年度)

C 同 六年二組(同)

D 稲城市立 小学校 六年 組(同)

四、まとめ 提言として

①「人の一生」の実践の有効性。

②「人の一生」の授業の発展学習材としての「人生諺」。

③現代の小学生が創った「十二歳創作コトワザ」の評価。

- ・自分の生活や環境を客観的にみる力
- ・自分の人生を長い視点で想像する力
- ・友達の作品から友達のよさを再認識する力

④新たな視点として、

・「芸術作品」としての評価。

・「作品」を鑑賞するなかで、相互に意見交換することにより、コミュニケーション能力が身につくと考えられる。学校公開などの授業に最適。保護者、地域を巻き込んだ授業として広めていきたい。

小田 富英(おだ とみひで)

東京都小金井市生まれ。東京都公立小学校教員を三六年勤め、二〇〇九年退職。作新学院大学人間文化学部特任教授を経て、現在、遠野文化研究センター研究員、常民大学運営委員、日本地名研究所『地名と風土』編集長など。柳田国男研究会、全面教育学研究会の発足当初からの会員で、故後藤総一郎、故庄司和晃両先生を師と仰ぐ。現在刊行中の『柳田国男全集』の編集委員として、解題作業、新資料収集、柳田国男新年譜(今年度完成予定)を作成中。共著に、『柳田国男伝』(三一書房)、『犯罪の民俗学 2』(批評社)、『わいわい学級』(現代書館)など。論文に、「野に生きる 水野葉舟論」や「平地人とはだれか」(共に『伊那民俗研究』や『遠野学』で三回ずつ連載)など。最近は『地名と風土』に「地名学習のすすめ」を連載し、裾野拡大を目指している。

